

効果的な英語学習支援プログラムの開発を目指して 食品科学科1年生の管理的自習支援方法の検証

松藤 薫子

日本獣医生命科学大学・英語学教室

要約 本研究では、本学の食品科学科の学生にとって効果的な自習支援の方法を見出すために、平成22年度の1年生対象の通年の英語の授業2クラスにおいて、授業の一環として自習を行った。前年度に教育効果の得られた管理的方法を採用し、学習量が増加するように工夫したプログラムを実践し、その効果を考察した。その結果、学習量増加により、英語力の維持もしくは向上の傾向がみられた。平均点以下の学生では学力向上の傾向がみられた。平均点以上の学生では実践率は高いが学力維持にとどまった。一週間に2時間程度の学習時間を確保させ、大変さが軽減でき満足感が高まるようなきめこまかな指導・支援が課題として浮上した。

キーワード : 英語教育, 自習支援, 管理的方法

日獣生大研報 60, 99-104, 2011.

1. 研究の目的

大学の英語教育では、グローバル化時代に対応できるコミュニケーション能力の習得を目標とする。コミュニケーションとは、言語と身ぶり・しぐさなどを媒介にして、自分と関わりのある情報や感情を他者と相互にやりとりする行為である¹⁾。具体的には、その目標は、学生が仕事や研究活動などで英語が必要になった場合に、辞書を利用しながら、学習した発音記号、文法、単語、表現などを使って対応できる程度の一般的な英語の基礎を教育することだと考える。現状は、高校卒業程度の基本的な英語力が不十分な学生が多く、また学習習慣が身につけていないため、英語の授業時間が週1回ないし2回の授業時間だけでは、英語学習は量的な点からはとても十分なものとは言えない。目標に到達するためには、授業の学習に加えて、授業時間外の学習（以下、自習）が不可欠である。まずは授業と自習を連携させ、その両方を教員による管理的な方法で始め、学習者のレベルや目標・興味・生活パターンに合う教材が探せるような指導・支援を行い、学習量を増やしながら、卒業するまでに自律的な学習者となるように支援していくことが必要である。

2010年から、食品科学科の学生にとって効果的な自習支援プログラムを開発することを中心課題として研究を進めている。前回の研究で、管理的支援が、自主性を重んじた自習支援よりも、満足度と実践率から高い教育効果が得られることがわかった。本研究では、管理的な方法を採用し、前回よりも学習量を増やす自習支援を行った。本研究の目的はこのような自習支援の効果を考察することである。

2. 先行研究：松藤（2010）²⁾

松藤（2010）では、平成21年度後期の1年生対象の英語の授業2クラスにおいて、授業の一環として自習を行い、それぞれのクラスで異なる方法（管理的方法・自主的方法）を用い、その効果を比較し、考察した。管理的方法では、図書館にあるレベル別多読用の本から主に本を選んで授業の一部と授業外に学習した。自主的方法では、提示された推薦教材を参考にして教材を選んで授業外に学習した。その結果、管理的方法が自主的方法より高い教育効果が得られることが分かった。自主的方法は、自分で学習時間の確保ができない、自分に合う教材を紹介された教材から選ぶことができないなど、学生の学習態度や意欲に対応できないことが明らかになった。

3. 研究方法

松藤（2010）の結果を踏まえ、2010年度通年の1年生対象の英語の授業2クラスにおいては、教員が4種類の自習に関して教材や支援方法を決め（学習者に選択の余地は残しつつ）学習者が実践すると学習量の増加が見込める自習を行った。その自習方法と支援の効果を、学習者の評価アンケート、学習者の実践結果、TOEIC Bridge テストの結果の3つの観点から検証した。

3.1 学習者

学習者は、2010年度通年、1年生を対象とする Basic English 49人と Oral English 45人の計94人である。食品科学科1年生の英語クラスは、入学時4月に実施する

TOEIC Bridge テストの得点に基づき、2 段階の習熟度別クラス編成である。今回学習の対象とした学習者のクラスは、上位者のクラス Basic English, 下位者のクラス Oral English である。

3.2 学習教材・形態と指導・支援方法

自習では、4 種類の自習を課した。1 段落を書き写す学習³⁾ (以下、段落学習)、単語学習、多読学習、選択学習である。自習期間中に、学生が協力し合って学習が継続できるように、学生間で教材や学習方法などについて情報交換会を行った。

段落学習では、授業のテキスト、レベルや興味に合わない場合は多読本のなかの文章の一段落を毎週 15 段落ノートに書く。書くだけでもよいが、できれば論理展開を意識して書くように指導した。通年を通してノートに段落数、計 375 個を目標とした。

単語学習では、授業のテキストや多読本から知らない単語を毎週 15 個、通年を通して計 375 個を使えることを目標とした。単語カードを使う場合は、最低限、表に英単語、裏に和訳と例文を書き、自分が覚えるように書き方や単語帳の活用法を工夫するように指導した。ノートの場合は、英単語、アクセント、和訳、引用文、辞書からの例文、英作文を書くことで、知らない単語を学習するように指導した。

多読学習では、図書館でレベル別多読用の本を紹介し、去年の学習者のおすすめ本も紹介した。自分で本を選び、毎週 20 ページ以上、通年を通して 500 ページ以上を読むように指導した。毎授業時間に 15 分読み、残りは授業外に読むように指導した。

選択学習では、推薦教材をプリントにして紹介した。プリントには、語学レベル (基礎・初級・中級・上級)、養成スキル (発音・語彙力・文法・会話・リーディング・リスニング・ライティング)、教材のタイプ (ウェブサイト・DS・CD 付きテキスト・PC・ラジオ・TV・本)、タイトルを明示した教材を載せた。そのプリントを参考にし、学習者に自分で教材を選ばせ、毎週 1 時間以上、通年を通し

て 25 時間以上学習するように指導した。

記録表を台紙に貼らせ、学習のたびに記録するように指導した。段落学習と単語学習はそれぞれ学習した数、多読学習は読んだページ数とコメント (読んだ内容や見出しや単語)、選択学習は学習した時間と教材名を書かせた。

段落学習のノート・単語学習の単語帳あるいはノート・記録表は、授業前までに、教卓前の机に提出させた。それを教員は、学生が読書している間に、学習内容を確認し、必要場合はコメントを書いて返却した。

情報交換会は、前期の半ばと後期の半ばに授業時に 1 回ずつ行った。用紙に成功話・失敗談、学習時間 (いつ・工夫していること)、読書本 (おすすめ本・おすすめしない本・理由)、選択教材 (おすすめ教材・おすすめしない教材・理由)、学習継続の秘訣、聞きたいことを宿題にして前もって書かせておき、それをもとに一人ずつ 1 分程度で発表させた。

3.3 支援効果の評価方法

支援効果は、学習者の評価アンケート、学習者の実践結果、TOEIC Bridge テスト (満点 180 点: リスニングとリーディング) の結果の 3 つの観点から検証した。学習者の評価アンケートは最後の授業時に、学習効果や教員の指導・支援効果などを 5 段階で評定させ、さらに自由筆記で感想・意見を書いてもらった。学習者の実践結果は、学習した段落総数、単語総数、総読書量、選択教材の総学習時間と記録表の提出回数を調査した。テスト結果に関しては、学習前 (4 月) と学習後 (1 月) にテストをして得点の変化を観察した。

4. 結 果

4.1 学習者の評価アンケート

学習者の自習に対する全体評価としては、7 割の学生が大変であると感じ、4 割強の学生が課題をやって良かったと評価している。図 1 は、アンケートの質問「自習が大変だったか、自習をやってよかったか」の回答集計結果である。自習全般に関して、71% の学生が「大変であると思う・ややそう思う」と感じたようであり、44% の学生が自

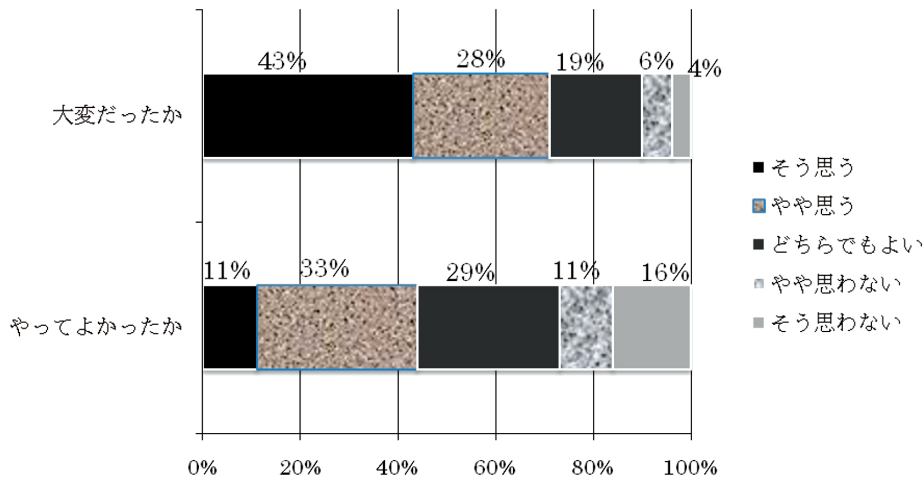


図 1. 学習者の自習の大変さと満足度に関する 5 段階評価の割合

習をやって良かったと評価している。

学習者の4種類の自習に対する各々の評価としては、5割の学生が単語学習・読書学習をやって良かったと評価している。表1は、アンケートの質問「段落学習/単語学習/読書学習/選択学習をやってよかったか」の回答集計結果である。内訳は、50%の学生が単語学習・読書学習、約40%の学生が選択学習、約27%の学生が段落学習をやって良かったかという質問に対して「そう思う・ややそう思う」と評価している。

4.2 学習者の実践結果

学習者の実践率は概ね高かった。段落学習に関しては、総段落数は平均354.78個(目標値375個の94.61%、最低25個、最高816個)であった。単語学習に関しては、総単語数は平均317.09個(目標値375個の84.56%、最低0個、最高510個)であった。多読学習に関しては、総読書量は平均506.83ページ(最低目標値500ページの101.37%、最低0ページ、最高1500ページ)であった。選択学習に関しては、総学習時間は平均22.87時間(最低目標値25時間の91.48%、最低0時間、最高48.90時間)であった。記録表の提出回数に関しては、総提出回数は平均17.23回(目標値22回の78.32%、最低0回、最高22回)であった。

表2は学生が選択した主な多読教材と選択教材の具体例を示したものである。

4.3 テストの結果

学習前と比べると学習後テストにおいては、点数の上昇がみられた。学習前テストは平均122.36点、学習後テストは平均124.13点で、1.77点の上昇であった。財団法人国際コミュニケーション協会によると、TOEIC Bridgeテストでは、10点の変動があれば英語力に変化があった可能性が高いとしている。この分析に基づくと、この1.77点の上昇は学力に変化がなかった、つまりが英語力が維持されたと評価できる。

以上から、この方法は、学生にとって大変であったが、実践率が高く、英語力の維持が可能な方法であると言える。実践率が高いことから学習量が増加したと推測でき、それが英語力維持につながったと考えられる。一方、やって良かったという満足感が十分ではなかったことは、課題の多さと教員による管理の強さが起因したものと考えられる。今後の課題として、大変さが緩和され、満足感の得られる支援方法の工夫が挙げられる。

5. 考 察

これまでは全体の結果をみてきた。本節では、まず上位クラスの結果と下位クラスの結果を比較し、次に前回(松藤2010)の結果と本研究の結果を比較しながら、結果を詳しく分析し考察を行う。

表 1. それぞれの学習に対してやってよかったと答えた学習者の割合

| | 自習全体 | 段落学習 | 単語学習 | 読書学習 | 選択学習 |
|---------|--------|--------|--------|--------|--------|
| やってよかった | 44.05% | 27.38% | 50.00% | 50.00% | 39.88% |

表 2. 学生が選択した自習教材の具体例

| | |
|------|---|
| 多読教材 | 新美 南吉 (著), Michael Brase (原著), <i>Gon, the Fox</i> こんぎつね, (ラダーシリーズ IBC パブリッシング) |
| | ルイス・キャロル (著), Anna Udagawa, <i>Alice's Adventures in Wonderland</i> 不思議の国のアリス (ラダーシリーズ IBC パブリッシング) |
| | グリム兄弟 (著), <i>Grimms' Fairy Tales</i> グリム傑作童話集(ラダーシリーズ IBC パブリッシング) |
| | A.A. ミルン (著), <i>Winnie the Pooh</i> クマのプーさん(講談社ルビー・ブックス 講談社インターナショナル) |
| | Stephen Rabley (著), <i>Marcel and the White Star: Easystarts</i> (Penguin Readers Simplified Text) |
| 選択教材 | 『英語漬け』(任天堂 DS) |
| | 『速読英単語』(Z会出版) |
| | 『Next Stage ネクステージ』(桐原書店) |
| | 『Forest フォレスト』(桐原書店) |
| | 『リトル・チャロ』(NHK 出版) |

5.1 上位クラスと下位クラスの比較

表 3 は学生の評価アンケート、実践結果、テストの結果について、上位クラスと下位クラスと比較したものである。差があまりないものは、自習の実践結果のなかの段落学習と読書学習と提出回数であり、それらは同程度の高い実践率であった（段落学習：上 95.91%，下 93.34%，読書学習：上 105.53%，下 97.29%，提出回数：上 79.55%，下 77.05%）。

差があるものは、3点あげられる。1つは自習は大変であるがやってよかったという認識である。下位クラスが大変さをより強く感じているが、やって良かったという満足度は少々高い（大変だったという評価は上 65.85%，下 76.74%，やってよかったという評価は上 39.02%，下 48.84%）。2つめは、自習の実践結果のなかの単語学習と選択学習の実践率である。上位クラスが下位クラスよりも高い。（単語学習：上 91.65%，下 77.61%，選択学習：上 116.48%，下 67.04%）。3つめは、英語力向上に関することである。自習前後のテストの点数の上昇幅は、下位クラスが高く、英語力向上した人数も多い（学習前後の点差：上 -2.56 点，下 +6.84 点，英語力向上の人数：上 4 人，下 17 人）。下位クラスは、英語力維持できた学生 26 人と英語力が向上した学生 17 人と英語力が低下した学生 1 人から構成されたとみなしてよい（低下した 1 人は、実践率は全体

の平均であった）。

以上から、管理的で学習量を増加させるような支援方法は、上位クラスと比較すると、下位クラスの方がより効果的であると推測される。上位クラスに関しては、この程度の学習量では学力向上には結びつかないこと、満足度を高めるような教員による支援と学習者の態度や工夫が、長期的な学習効果をもたらすのではないかと考えられる。

5.2 前回（松藤 2010）と本研究の比較

表 4 は前回（松藤 2010）の学生の評価アンケート、実践結果、テストの結果について整理したものである。前回は、本研究に比べ提出回数、学習期間、学習量が少ない。前回では、提出回数は月 1 回（上位クラスは授業の提出物が重なり適時に指示できず、半期で 2 回となった）、学習期間は半期であった。上位クラスは、選択教材で、一週間に 2 時間以上、後期を通して 32 時間以上学習することを目標とした。下位クラスは主に図書館にあるレベル別多読本を一週間に 20 ページ以上、後期を通して 240 ページ以上読書することを目標にした。

本研究の表 3 と前回の表 4 を比較すると、上位クラスでは、差があまりないものは、学習前後のテストの点差である。どちらも学習後のテストの平均点が下降している（前回 -3.19，今回 -2.56 点）。差があるものは、前回は、自習

表 3. 上位クラスと下位クラスの比較

| | 全体 | 上位クラス | 下位クラス |
|--------------|----------------------------|-----------------------------|---------------------------|
| アンケート | | | |
| a) 大変だった | 71.43% | 65.85% | 76.74% |
| b) やってよかった | 44.05% | 39.02% | 48.84% |
| 実践結果 | 354.78 (25-816) | 359.65 (165-510) | 350.02 (25-816) |
| 学習量 段落 375 個 | 94.61% | 95.91% | 93.34% |
| 単語 375 個 | 317.09 (0-510) 84.56% | 343.70 (134-510) 91.65% | 291.04 (0-492) 77.61% |
| 読書 500p 以上 | 506.83 (0-1500) 101.37% | 527.67 (67-1259) 105.53% | 486.45 (0-1500) 97.29% |
| 選択 25h 以上 | 22.87 (0-48.90) 91.48% | 29.12 (0-48.90) 116.48% | 16.76 (0-85.10) 67.04% |
| 提出回数 22 回 | 17.23 (0-22) 78.32% | 17.50 (0-22) 79.55% | 16.95 (2-22) 77.05% |
| テスト結果 | | | |
| 学習前平均点 | 122.36 点 (46-154) | 134.73 点 (124-154) | 108.89 点 (46-122) |
| 学習後平均点 | 124.13 点 (86-156) | 132.17 点 (112-156) | 115.73 点 (86-134) |
| 学習前後の点差点 | +1.77 点 | -2.56 点 | +6.84 点 |
| 英語力向上 | | | |
| 10 点以上増の人数 | 21 人 (87 人中) | 4 人 (43 人中) | 17 人 (44 人中) |
| 英語力低下 | | | |
| 10 点以上減の人数 | 9 人 (87 人中) | 8 人 (43 人中) | 1 人 (44 人中) |

表 4. 前回(松藤 2010) のまとめ

| | 上位クラス | 下位クラス |
|----------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|
| アンケート a) 大変だった | 27% | 41% |
| b) やってよかった | 60% | 74% |
| 実践結果 学習量 | 選択学習平均 23.07h 目標 32h の 72.09% | 読書平均 241.76p 目標 240p の 100.73% |
| 提出回数 | 平均 1.32 回 目標 2 回の 66% | 平均 3.62 回 目標 4 回の 90.50% |
| テスト結果 | | |
| 学習前平均 125.56 点 | 135.18 点 | 111.71 点 |
| 学習後平均 124.2 点 | 131.99 点 | 113.67 点 |
| 学習前後の点差 -1.22 点 | -3.19 | +1.96 点 |
| 英語力向上 10 点以上増 の人数 12 人(79 人中) | 4 人(46 人中) | 8 人(33 人中) |
| 英語力低下 10 点以上減 の人数 13 人(79 人中) | 6 人(46 人中) | 7 人(33 人中) |

は 1 種類で大変ではなかった(大変だったという評価 27%) が, 提出回数が少なく, 教材を自分で選択しなければならなかったため, 実践率が低かった(72.09%)。一方, 本研究では, 自習が 4 種類で大変であった(65.85%) が, 毎週の提出で, 教材・方法・時間が教員による指導が多かったため, 高い実践率を示した(4 種類の課題の実践率の幅 91.65%~116.48%)。

下位クラスでは, 読書課題の高い実践率にはあまり変化がなかった(前回 100.73%, 今回 97.29%)。差があるものは, 前回が大変さは少しで満足感が高かった(大変さ: 前回 41%, 今回 77%, やってよかった: 前回 74%, 今回 49%)。また前回が提出回数の実践率が高かった(前回 90.50%, 今回 77.05%, ただ前回が半期に 4 回, 今回は通年で 22 回であるので, 単純には比較できない)。今回は英語力の向上がみられた。学習前後のテストの点差が今回が向上し(前回 +1.96 点, 今回 +6.84 点), 英語力向上とみなせる 10 点以上増の人数が多く(前回 33 人中 8 人, 今回 44 人中 18 人), 英語力低下とみなせる人数が少なかった(前回 33 人中 7 人, 今回 44 人中 1 人)。

今回の方法は, クラス全体において大変さが感じられ満足感が得られにくい点は改善する余地があるが, 高い実践率が示されたことは, 学習前後のテストの点差に表れ(前回 -1.22 点, 今回 +1.77 点), 下位クラスにおいては, 学習量の増加は英語力維持・向上につながった。上位クラスにおいては, 提出回数の多さが高い実践率に結びついたようである。しかし, 学習量を多くしてもテストの点数にほぼ変化がなかった。課題は, 上位クラスの学生にとって, 少々の大変さがあっても満足度が高く, 一週間に 2 時間程度の学習で効率よくできるような方法がどのようなものか

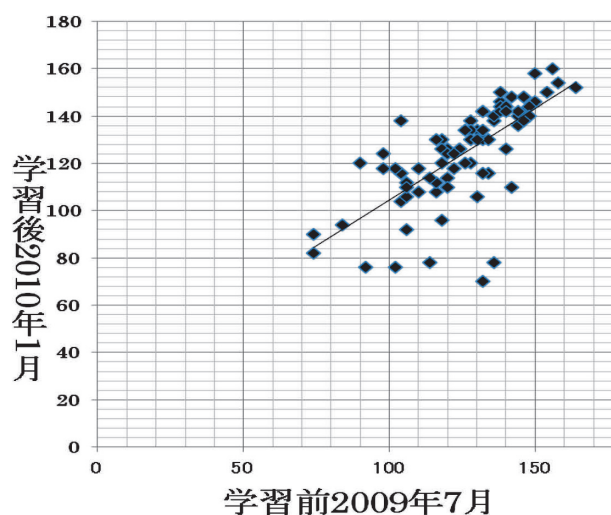


図 2. 前回の散布図(学習前後に実施したテストの点数)

を検討することである。

最後に, 前回みられた学習前と学習後の下降幅が大きかった学生の原因について考察を加える。図 2 は前回の学習前と学習後のテストの点数の散布図であり, 図 3 は本研究のものである。図 2 をみると, 回帰線から大きく下に外れている学生は, 下降幅の大きい学生である。松藤(2010)では以下のことを指摘した。下降幅の大きい 10 人は学習前/後のテストの点差が平均 24.80 点も下がった。その理由として, 学習後のテストを後期期末試験テスト中に行ったため, 他の試験の勉強による寝不足・体調不良や, 学習後のテストが成績に反映されないなどにより, 英語の試験に集中できなかった可能性がある。本研究では, 学習後のテ

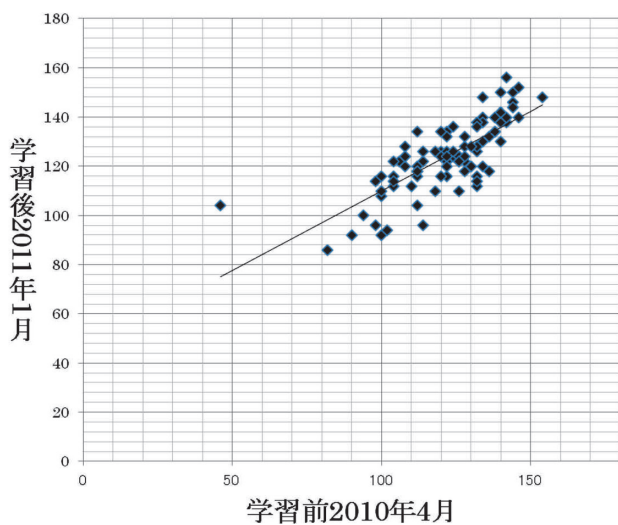


図 3. 本研究の散布図

ストを後期末試験テスト週の前週に行った。図 3 からわかるように、大幅に下降する学生がみられなかった。後期末試験テスト中というのは、テストの点数に大きな影響を及ぼす一要因であることが明らかになった。

6. ま と め

本研究では、教員による管理的方法で学習量を増加させる自習を行い、このような自習支援の効果を 3 つの観点で考察した。1 つは、学生の評価において、71% の学生が大

変であると感じ、44% の学生が自習をやってよかったという評価が得られた。2 つめは、学生の学習の実践結果においては、段落学習個数、単語学習個数、読書の量、選択学習時間、提出回数に関して、教員が設定した目標値に対して高い達成度が得られた。3 つめは、学習前後のテストにおいて、英語力維持が確認できた。下位クラスでは、全体的に英語力向上の傾向がみられた。

前回 (松藤 2010) と比較すると、自習実践の割合が増加し、学習前後のテストの上昇がみられた。教員によるこまやかな指導や支援は実践率を高め、実践率が高いと学習効果が上がりやすいと推察される。しかし、今回のほうが大変さが強く、満足度が低かったという点は、学習が継続されない可能性が大きい。今後は、一週間に 2 時間程度の学習時間を確保させ、授業と自習の連携を強めて、自習の大変さを軽減し満足感を高め、高い学習効果の得られる指導・支援方法を検討し、そのような自習支援の実践と効果を検証したい。

引用文献

- 1) 中森誉之 (2009) 『学びのための英語学習理論』ひつじ書房 p. 187.
- 2) 松藤薫子 (2010). 「効果的な英語学習支援プログラムの開発を目指して 食品科学科 1 年生 2 クラス自習支援方法の比較」『日本獣医生命科学大学研究報告』59, pp. 105-112.
- 3) 黒田龍之助 (2009). 『ぼくたちの英語』三修社 pp. 109-110.

Toward the Development of a New Effective English Learning Support Program : A supervised self-learning method

Shigeko MATSUFUJI

Laboratory of the English Language,
Nippon Veterinary and Life Science University

Abstract

To identify effective ways to support self-learning by students, a research was conducted on first-year students who entered the Department of Food science and Technology at Nippon Veterinary and Life Science University in the 2010 academic year. Students' progress in learning English through a supervised method of self-learning was examined. Under the supervision, the students undertook four different tasks for two hours per week. The teacher provided the students with detailed instructions for learning, recording and submitting material. The effectiveness of the method was confirmed. A teacher's support appears to be vital to relieve students' feeling that it is hard to learn English and to give them a feeling of satisfaction.

Key words : English education, English learning support program, a supervised self-learning method